

正宗白鳥

フロローベルについて

フローベルについて

外国文學の鑑賞は困難である。ラフカチオ、ヘルンが日本の学生のために述べた歐洲文学講義は、平易明晰で、しかも学究的でなく、我々に歐洲諸作家の持味を味わわせるように説かれているので、歐洲文学鑑賞上の最高の入門書である。それでヘルン自身の独得の見解は光っているのだから面白い。

私は、昨夜銀座を散歩しながら、露店を覗いていたが、ふと、ヘルン著「東西文学評論」の日本訳（聚芳閣出版）

を見つけた。すでに読んだことのある講義筆記の翻訳ではなかろうかと思つたが、兎に角、それを購つて、ホテルへ歸つた。開けて見ると、この評論集は、彼れが日本渡来前、三十代の若い頃、ある新聞に匿名で連続寄稿した文芸評論を蒐集したもので、数年前彼れの心酔家であつた某米人が、古新聞の綴込みを苦心して調べて、一冊の書物に仕立てたのだそうである。「これ等のエッセイが本になって現われるのはこれが最初である。今日に至るまで、ヘルンの愛読家達には知られてもいず、また手に入れることも出来なかつたものである」と、序文に書

かれています。

取扱われた題目が皆私などの興味を唆るものである。ことにフラン文学雑感が面白い。ヘルンは仏文学愛好者で、フランスのいろいろな新作を英文に訳しては、新聞に掲げていたので、翻訳しながら、傍ら感想を述べていたのであった。我々が興味をもって読んだアナトールフランスの「シルベストボナールの罪」は、彼れの翻訳であつたが、彼はモウパッサンやロティやブールジェなどの作品を、それが現われると間もなく訳していた筈だ。私はヘルンの翻訳によって、それ等の仏文学の傑作を味

いたいと思っている。

ところで、このヘルンの「文学評論」の面白いのは、それが時評式であるからである。ポーの際物的文学評論の面白いのと同様である。ヘルンも日本の大学で講義をした時には、たとえ学究的でなくっても、歐洲の諸作家とその作品とを文学史上の人物及び作品として取扱っていたので、自然勿体ぶっていた。威儀をつくろうことを免れなかった。ところがこの書に収められている評論は、その当時に現われた作品に対して、直ちに感想を述べたのであるから、所謂月評式の面白さがある。生きがいい。

ロマンチストであつた青年のヘルンが、ゾラやモウパッサンなどの新作に対する批評振りの面白さつたらない。私は、「改造」や「中央公論」の新作に対する日本の月評家の批評振りを連想した。

ヘルンは、モウパッサンの名文章を愛好していたのであつたが、その醜陋な世相の無遠慮な描写には嘔吐を催していた。「女の一生」はいろいろな点で一番感心出来ないものであるが、そんなものを書いたことは一面彼れが金儲けに甚だ抜目のないことを示している、と云い、全体モウパッサンはゾラの金銭成功を見ならつて、自分

も同様な不健全な欲望を満足しようとしたことは確かである」と断じている。

モウパッサンの死の恐怖に対するヘルンの批判は、ロマンチストと自然主義者との心境をよく現わしていて、私には一つの考うべき問題が提供された感じがした。ゴッセル兄弟を芸術家でなくて商人だと激しくやっつけているのも面白い。

しかし、私がこの「文学評論」を取出して感想を書く気になったのは、さういう自然主義罵倒に、今更らしく感心したためではない。集中の「フローベルの友人」と

題した考証的記事——フローベルの作品の成立経路——
によつて、非常に心を打たれたためである。

我々が歐洲文学を鑑賞するのは困難である。我々はメ
レヂコフスキーの「フローベル」論や、ブランデスの「十
九世紀の名作家評論」中の「フローベル論」によつて、
この大小説家の真価を教えられているのだが、これ等の
批評家は、大袈裟に勿体ぶつた評論を堂々と述べるのを
例としていて、世話に碎けたところがない。

我々は、フローベルが、ある事物を言現わすにはただ
一つの言葉しかないと云つた文章観を、そのままに信じ

さされて、「ボヴァリ夫人」などは、作家が極度の彫琢を試みた完全無比の芸術であるように盲信して、いたのであったが、ヘルンが千八百八十四年二月十七日に発表した「フローベルの友人」と題する研究記事を、四十余年後の今日、露店で買って来た文集によって読むと、日頃の盲信が急にぐらつきだしたのである。西洋の古典でも日本の古典でも、批評家の極めた型によって見ることの愚かさを感じた。

「正直で、子供のように人を信じ易かったフローベルは、終に、彼れの慈悲に縋る人逢の、真のまた偽りの窮

乏を救うために、自分の私有財産をも投げ出してしまったと同様に、彼れの文学的、生活の大部分を、友と信じた人達の気紛れのために、犠牲にしていってしまったのである」と、ヘルンは断じている。

フローベルの作中、詰らない友人の「おせっかいな修正」や「助言」で滅茶々に傷つけられなかった唯一の本は、「二三つの物語」であつて、これだけが、彼れの本来の才能を遺憾なく發揮していると、ヘルンは云っている。他の作品は、すべて周囲の文学的に無理解な友人の助言を受入れて書直さされたのだ。「ボヴァリ夫人」は

取りわけ酷い目に会った。まづ、第一に、一ページ毎に、ルイブイエという詰らない友人が、直したり加筆したりした。それから、マクシーム、デユ、カンという詰らない友人の手へ廻された。その友人が、それをどんなにじっくり廻したかは、モウパッサンが述べている。そうして、手足をもぎ取られた残骸同様の原稿が、ようやく出版され終ろうとした時、パリ評論が酷評したのでますますひどく手を入れられた。だから、「ボヴァリ夫人」は全く力の抜けた作品になっていると、ヘルンが評している。フローベルが寡作だったのも、我々が今まで盲信し

ていたような理由からではなくって、友人のおせっかいのためであった。友人達のおせっかいがなかつたら、フローベルは、僅か五六冊ではなく、二十冊近くの長篇を發表したであろうと、ヘルンは推察している。仏文学については最も造詣深きヘルンが、当時の文献によって調査した所の説を出鱈目とは云われまい。

しかし、ヘルンの所謂不具の作品「ボヴァリ夫人」が、四十年後の今日、本場のフランス文壇でますます光輝を放って、日本でも識者に心酔されているのを見ると、ヘルンや、あるいはモウパッサンなどによって、無理解な

詰らん友人として侮蔑されていた連中も、案外批評眼を
具えていたのではあるまいか。どちらがどちらか分らな
くなくなってしまおう。

日本文学電子図書館

フローベルについて

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館